

Deep Purple - 3 Nights in Florida July 13, 14, and 15, 2007

レポート : 南 陽一郎

1998年の『Abandon』リリース以来、コンスタントにツアーを続けている感のするディープ・パープル。だが本格的な北米ツアーは2004年の『Bananas / Machine Head』ツアーであり、フロリダ公演ともなるとDVD『Perihelion』としてリリースされた2001年6月のマイアミ以来6年ぶりとなる。約一年半続いている『Rapture of the Deep』ツアーとしては今回が初の北米ツアーとなるのだから驚きだ。その理由は今号に掲載したスティーヴのインタビューを参照して頂きたいが、以前から書いてきた様にパープルはフロリダとはとても深い絆を持っており、彼らのアメリカにおけるホームグラウンドともいえる土地である。オーランドからそう遠くないところにスティーヴが居を構えている事から、彼の加入以降オーランドの北にあるグレッグ・ライク・スタジオにて『Purpendicular』と『Abandon』の二枚が制作された。2003年にマイケル・ブランフォードがプロデューサーとなって以来、アルバム制作はロサンゼルスで行われてきたが、プリプロダクションには今でもグレッグ・ライクが使われているのだ。

そんな訳で久々のフロリダツアーに対するメンバー達の意気込みも相当なものだった。まず最初がオーランドのHouse of Bluesにおける親密なクラブショー、次にマイアミ近くのポンパノビーチにおける中規模アンフィシアターにての屋外ショー、最後がタンパ近郊クリアウォーターにある約2千人収容のシアターでのショー、と公演の環境も三地三様といったところ。今回はこの久々のフロリダツアーの全貌をレポートしていく。

May 13, 2007: House of Blues Club Show, Orlando, FL., U.S.A.

Setlist:

1. Pictures of Home
2. Things I Never Said
3. Into the Fire
4. Strange Kind of Woman
5. Rapture of the Deep
6. Fireball
7. Contact Lost / Steve Morse solo
~ A Well Dressed Guitar
8. When A Blind Man Cries
9. Lazy
10. Knockin' at Your Back Door
11. Don Airey solo
~ Perfect Strangers
12. Space Truckin'

13. Highway Star
14. Smoke on the Water
- Encore:
15. Hush (Incl. Drums Solo)
16. Bass Solo ~ Black Night

この日会場のハウス・オブ・ブルースに私が到着したのは七時を少し廻ったところ。前座には懐かしい感もするエドガー・ウィンター・バンドがついており、彼らはこのフロリダ三公演全てでサポートを務めている。中に入るとフロアは既にギッシリ埋まっており、入り込む余地はない。二階もステージ真横のPA 目元以外は殆ど満員だ。この会場は 1200 人収容の筈だが、正味 1500 人はいたのではないか。7 月のフロリダのクラブにこれだけの人数が集まったのだから、その熱気は半端なものではないのはお察しつくだらう。

8 時きっかりにエドガー・ウィンター・バンドが登場し、“Free Ride” や “Frankenstein”、それに “Tobacco Road” といった代表曲を連発してくる。エドガーの歌もギタリストと掛け合う様も昔のままだ。彼のトレードマークであるシンセを首から下げて弾いたり、サクスを吹きまくったりする姿も相変わらず決まっている。エドガーと彼のバンドの熱演は確実にパープルに対する観客の期待を煽っていた。

AC/DC のアコースティック・ブルース・カバーやヴァン・ヘイレンの “Jump” がキャバレー用にアレンジされた異様な BGM に苦悩させられた後、客電が落ちシンセの SE が流れる。その中をイアン・ペイスの怒涛のドラミングが響き渡り、オープニングの “Pictures of Home” が始まる。ショウの構成自体は 5 月まで行なわれていた欧州ツアー、もしくは昨年日本公演と然程変化していない。セットリスト的には『Rapture of the Deep』からの選曲を減らし、“Into the Fire”、“When a Blind Man Cries”、そして “Knockin’ at Your Back Door” を加えたものとなっている。イアン・ギランの声も良く出ているし、ロジャーとペイシーも相変わらずガッチリ一体となって超ど級の重量グルーブを生み出している。このグルーブこそがディープ・パープルの基本である事を、もっと多くのファン達にも認識して欲しいと思うのだ。

スティーヴがバンドに加入して既に 13 年になるが、彼が今のパープルに欠かせない存在である事はライブを観れば一目瞭然となる。オープニングの “Pictures of Home” でとてもリリカルなプレイを披露し、その驚異的な指捌きで観衆を圧倒する。これだけで 80 年代以来パープルを生で見えていなかったオールドファンを引き込んでしまうのだ。昔ながらの定番曲において彼独自の解釈を混ぜながら、且つ本来の感触を壊していない微妙なバランスも貢献している。“Strange Kind of Woman” や “When a Blind Man Cries” では特にそれが顕著で、異なったアレンジが曲に新たな生命を吹き込んでいた。

スペース・シャトルの基地があるフロリダにおいて、コロンビア号の悲劇に触発された “Contact Lost” がプレイされたのはある意味然るべき事かもしれない。このスティーヴのソロ曲は欧州では演奏されていなかった。とても感情の籠った繊細なトーンを駆使する彼のプレイに観衆は息を呑む。それが超絶的ソロへと続き、そこからお馴染みとなった “The Well Dressed Guitar” が飛び出す。ドンとスティーヴによる 16 連符応酬ユニゾンによるクラシカルな決めは、いつ聴いてもスリリングだ。

その後ドンがジョンの Hammond B3 と全く同じあの音で “Lazy” を弾くと、満員のフロアに火が点いた様になり、私の横にいた白髪の親父などビールのジョッキを振り回して目に涙を浮かべている。この夜の観客は実に最高で、乗る時には大乗りしながらもパープルの演奏をとにかく “appreciate” していた。こんな親密なクラブにおいて、本物のディープ・パープルが目の前で “Lazy” を演奏してくれた事に感無量となる 50 代の親父達こそ、この夜の主演なのだ。続く “Knockin’ at Your Back Door” のタイトな演奏が予想外に素晴らしく、私は 1984 年再結成時のテーマ曲がここまで力強いものだった事に今更ながら驚かされた。それからドン・エイリーのキーボード・ソロが登場する。“Lazy” で既に弾き捲くっていたドンだが、この夜はフロリダ三公演において彼のソロがフルヴァージョンで披露された唯一のショーとなった。スターウォーズのテーマが登場したのもここだけだ。それが “Perfect Strangers” へと移行し、乗ったイアンはブレイクでスパニッシュ舞踏の如き真面目なのかふざけているのか分からない舞いまで披露する。正にグルーヴの化け物の様な “Space Truckin” ではロジャーとスティーヴ、そしてドンが一体となりあの有名なコーラスのフレーズを繰り出す。狭いクラブにてこの迫力で演奏される “Space Truckin” は正に白眉の出来で、三日間通した中でもベストの演奏だったと思う。

この後は有名曲が怒濤の如く飛び出してくる。“Highway Star” はペイシーが一風変わったリズムを刻む事で始まるのだが、この曲の途中でギランが息切れしたような顔つきを見せ始め、ギターソロの決めフレーズを歌う時にもスティーヴについていけなくなり、鶏の真似をするという不思議な行動を取っていた。アンコール一発目の “Hush” はイントロでジャミングが行なわれ、曲がなかなか始まらず困惑した様な印象を受けた。やっと曲が始まってからもソロの最中にドラムソロとジャムが入り、普段の同曲とはかなり異なった印象を与える。うねる様なロジャーのベース・ソロから “Black Night” が飛び出す。パープルは北米では余りこの曲を演奏しない。それはこれが北米で余りヒットしなかったのと、元来『In Rock』に収録されなかった為に知名度が低いというのが理由だ。当夜これが演奏されたのは、それだけバンドがこのショーを楽しんでいたのを証明している。観衆も欧州並にイントロを合唱するが、この夜はいかんせんバンドが羽目を外しすぎた感があった。だが会場の盛り上がりは最高だ。二時間にも及ぶ熱演はこうして幕を閉じた。この夜のハイライトとなると “Space Truckin”、“Knockin’ at Your Back Door”、“Lazy”、ドン・エイリーのソロ、そして “Hush” のロング・ヴァージョンというところか。総合的に見ても、クラブならではの熱気と親密感に溢れた名演だったと言えるだろう。

July 14, 2007: Pompano Beach Amphitheatre Outdoor Show, near Miami

Setlist:

1. Pictures of Home
2. Things I Never Said
3. Into the Fire
4. Strange Kind of Woman
5. Rapture of the Deep
6. Fireball

7. Contact Lost / Steve Morse solo
~ A Well Dressed Guitar
 8. When A Blind Man Cries
 9. Lazy
 10. Don Airey solo
~ Perfect Strangers
 11. Space Truckin'
 12. Highway Star
 13. Smoke on the Water, with Mark Stein (Org) and Kevin Morse (G)
- Encore:
14. Hush (Incl. Drums Solo)
 15. Bass Solo ~ Black Night
-

「いや、暑かった！ もうステージの上で溶けちまうとこだったよ！」 終演後にロジャー・グローヴァーは筆者にこう語った。この日はオーランドとは打って変わって 3500 人収容の野外アンフィシアターにおける公演だ。フロリダ南部のマイアミは中央部のオーランドやタンパよりも蒸し暑く、この日の気温も摂氏 30 度は裕に越している。そんな中での野外公演だから観る方も堪らないが、ステージに上がってスポットライトを浴びながら動き回る方はもっと堪えるだろう。ポンパノビーチはマイアミから車で約 20 分のところにあり、大都市マイアミ近郊での公演らしく猛暑にも拘らず 3 千人を越す観衆が集まった。楽屋にはアイアン・メイデンのニコ・マクブレインがいたが、彼が楽屋にいるというのが如何にもパープルのショウらしい。

住宅街からそう遠くない位置にある野外会場の為、バンドは定刻の 8 時半にはステージに現れた。驚いたのは、パープルが登場するや否や何百という群集がステージ前に突入してピットを作ってしまった事だ。こうなると指定席もへったくれもなく、ステージ前は大騒ぎのパーティ状態と化す。そしてその騒ぎが会場中に感染し、オープニングからもうお祭り騒ぎだ。この光景は 70 年代の武道館ライブよりも壮観なものだった。それはファンの気質によるところが大きい。マイアミには南米から移民してきたラテン系のファンが多く、オーランドの礼儀正しい熱狂とマイアミの快楽主義的熱狂には大きな違いがある。ビールは飛び交うわマリファナは廻ってくるわ、これが 2007 年とは思えないヴァイヴが会場を包んでいる。

肝心のパープルの演奏は前日よりよりタイトになっており、イアンの声も好調で “Pictures of Home” からエンジン全開と言った具合だ。フロント三人の顔からは笑みが漏れ、全員が実に気持ちよさそうにプレイしている。“Into the Fire” ではオリジナルのイアンの絶叫がギラン時代以降の怒号の様な叫びに変わっているのが興味深い。オーランドの項でも書いたように、『Rapture of the Deep』からはたったの二曲（その内の一つはボーナストラック）しか演奏されなくなってしまったが、やはり久々の北米ツアーという事でベストヒット的な選曲はやむをえないのであろう。それが正解だったのはこの夜のオーディエンスの爆発ぶりが物語っている。“Fireball” では流石にイアンの声が苦しそうだったが、彼の喉を休めるべくその直ぐ後にスティーヴのソロスポットが用意されていた。この夜のパーティムードを意識し、彼はここでレイナード・スキナードの “Sweet Home Alabama” をプレイして観衆の熱狂を更に煽る。その後を受

けたのが“When a Blind Man Cries”だが、こういったバラードすらも過熱し過ぎた観衆の頭を冷やす事は出来なかった。ここで聴かせたギランの歌は前日を上回っていた。

“Lazy”ではドンソロが光っていたが、時間制限のおかげか、はたまた暑さの為か“Knockin’ at Your Back Door”はこの日は無し。それに続くドンソロもやけに短く、あっという間に“Perfect Strangers”が始まってしまった。それから『Machine Head』の黄金トリオが飛び出す、最後の“Smoke〜”ではスティーブの息子であるケヴィン・モースとヴァニラ・ファッジの重鎮マーク・スタインが参加しショウを盛り上げる。ケヴィン君はまだ16歳の高校生なのだが、その腕前は既にかなりのもので、父親としっかり渡り合ってソロを交換していた。筆者の横にいたファンが「あいつはデフ・レパードの新メンバーか」と訊いてきたのには目が点になったが、彼がそう思ったのも分からないこともない。そしてマーク・スタインだが、さすがハードロック・オルガンの創始者である。ジョン・ロードもそうだが、ハモンドB3を知り尽くしているという点では彼の右に出る者などそうザラにいないだろう。この豪華な競演は当夜ならではのお祭りのエンディングであった。

アンコールの“Hush”と“Black Night”も傑出した出来で、共に地に足の着いた演奏が聴かれた。特に“Black Night”は前夜の“Space Truckin’”と同じくらい素晴らしい出来を誇っており、そのグルーヴは『24カラット』に収録された1972年8月17日の武道館での名演を想起させる程だった。

10時半にはショウは終わり、バックステージではニコとマークがパープルのメンバー達と一緒に関係者達と歓談していた。もしニコがジョイントしていたらもっと凄い事になったろうな、と思いながら、私はスティーブと翌日のインタビューの時間を調整し、ロジャーと歓談してから会場を後にした。この夜のベストテイクは間違いなく“Black Night”と“Smoke on the Water”だ。“Highway Star”と“Space Truckin’”における観衆の反応も凄かったが、個人的にはこの夜の“Rapture of the Deep”の出来もかなりのものだったと思う。

July 15, 2007: Ruth Eckard Hall Theatre Show, Clearwater (near Tampa)

Setlist:

1. Pictures of Home
2. Things I Never Said
3. Into the Fire
4. Strange Kind of Woman
5. Rapture of the Deep
6. Fireball
7. Contact Lost / Steve Morse solo
~ A Well Dressed Guitar
8. Knockin’ at Your Back Door
9. Lazy
10. Don Airey solo

- ~ Perfect Strangers
11. Space Truckin'
12. Highway Star
13. Smoke on the Water
Encore:
14. Hush
15. Bass Solo ~ Black Night
-

遂にフロリダ最終公演日である。会場のルース・エカード・ホールはタンパの橋向こうにあるクリアウォーターという街にあるシアターで、構築以来まだ10年も経っていないのではないかと。私もここで何回かショーを見ているが、正に近代劇場といった感じで椅子もクッションのついた心地良いもの。脇には約五列毎にロビーからの入り口が設けられ、そこをガードしているのは老人の案内役達だ。ステージ前の席は全て年間予約席であり、お金持ちの顧客が確保している。だから観衆は滅多な事では立たない。それはパープルでも同様だった。クラブでの熱狂や野外スタジアムでのお祭りとは比較にならない。最初から最後まで座って見られるディープ・パープルというのも不思議なものだが、また異なった角度からバンドを捕らえるという意味では最適である。

結論から言えば、このバンドの音楽性と技量はそういった聴衆にも充分通用するものであり、その水準の高さは並大抵のものでは無い、という事だ。現在のパープルのメンバー各自がその道の達人である事は周知の事実だが、そんな五人が目前で作り出す音楽を座ったまま1時間50分に渡りじっくり堪能出来るのだから、それが悪い体験になる訳が無い。

この日の演奏においては特にどれがベストテイクという事はなく、全体的にとてもタイトでミスもなく、このままライブ盤になってもおかしくない出来映えだった。敢えていうならば、“Contact Lost”に続いて“Sometimes I Feel Like Screaming”のあのフレーズを一瞬だけソロに導入してくれたスティーヴのスポットが絶品であった。もう一つのハイライトは“Smoke on the Water”にてエドガー・ウィンターと彼のギタリストが飛び入りした事で、特にイントロに於けるエドガーのサクソとスティーヴのギターへの応酬はそれは凄いものだった。これらの裏話に関しては公演直前に行なった彼とのインタビューを是非ご参照頂きたい。この時パープルのマネージャーであるブルース・ペイン氏がステージ脇に上がって、この歴史的競演の模様を撮りまくっていた。

残念だったのはこの夜もドンがフルヴァージョンでなかったのと、ペイシーのドラム・ソロが無かった事、それと“When a Blind Man Cries”がカットされた事か。まあ、その代わりに“Knockin' at Your Back Door”は復活したのだから、文句は言えないが。

このショーの後、ロジャーは「ツアーの初めにしちやあかなり良い線いってたろ？」と語った。イアン・ギランもアロハシャツに着替え、リラックスしながら友人達との時を過ごしている。スティーヴも奥様とケヴィン、そして彼のお母様に囲まれ貴重な家族との時間を満喫している。ドンはファン数人と真剣に話していた。次の

イリノイ公演までの二日間はオフとなり、メンバー達は6年ぶりのフロリダツアーを終え帰途について行く。色々とお世話になったサラ女史に別れを告げ、私は会場を後にした。

ロジャーと話している時、彼はウォーレン・ヘイズとの交流に関して話してくれた。ロジャーのソロ活動に於いての盟友であるランドール・ブラムレットはチャック・レヴェールの親友でもある。スティーヴ・モースはデレク・トラックスやチャックとも仲が良い。そんな事から私はオールマン・ブラザース・バンドとディープ・パープルの共通点を見てしまう事もある。現在のオールマン・ブラザースもドウェイン・オールマンとディッキー・ベッツという二人の核を欠いており、その穴を埋めたのがデレクとウォーレンという二人の天才的ギタリスト達だ。そんなオールマンズが毎年恒例のビーコンシアター公演を行なう際、フィルモア・イーストの再現だけを目当てに足を運ぶファンがいたとしたら、それは本当に勿体無い事だと誰もが思うだろう。

バンドの創始者であるジョン・ロードとリッチー・ブラックモアの不在を悔やむオールドファンが多いのも事実だ。だがリッチーがいないパープルなんて、と言う以前に、ブラックモアズ・ナイトこそがリッチーの本音である事も理解して欲しいと思う。そして現在もディープ・パープルというバンドがここまで有機的に機能出来るのは、スティーヴ・モースとドン・エイリーという二人の名手がいるからという事実も認識して欲しい。何よりも今のパープルを見ていると、そこに本心からプレイする事を楽しんでいる五人を見つける事が出来るのだ。リッチーが在籍していた最後の頃のパープルの姿は、見ている側としても悲痛に感じる事が少なくなかった。紫は深くなるのではなく、暗くなる一方だった。だが今のパープルには、彼らとの演奏を心から楽しんでいる世界有数の名ギタリストがいる。イアン・ギランは「俺はパープルの陰に隠れるのではなく、紫の陽光を浴びながら生きていく」と以前語ったが、スティーヴ・モースの持ち込んだ透明な空色が再び紫に陽光を当てるきっかけとなった、と私は思う。サンシャイン・ステート（陽光の州）と呼ばれるこのフロリダにて今回ディープ・パープルのパフォーマンスを体験出来た者達は、確実に紫の陽光を浴びる事が出来たと私は感じている。